

令和元年6月14日現在

機関番号：33908

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02783

研究課題名(和文) tough構文の統語構造の歴史的発達に関する実証的研究

研究課題名(英文) An Empirical Approach to the Historical Syntactic Development of the Tough Construction

研究代表者

中川 直志 (Nakagawa, Naoshi)

中京大学・国際英語学部・教授

研究者番号：70321015

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：現代英語の tough 節においては、一般に、be 動詞に導かれる受動構文が現れることができないとされるが、getあるいはbecomeに導かれる受動構文になると容認性が向上する。また、現代英語では許されない be 動詞に導かれる受動構文が、1400年代前後を中心に tough 節において可能であったということも観察されている。これらの事実は、受動構文における be の統語的位置付けが、本動詞から助動詞へと通時的に変化したと考えることによって、tough 節において助動詞が生じ得るような機能範疇が発達しなかったという本研究の分析と符合する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、統語構造の歴史的変化を、生成文法という理論的枠組みで分析する一つの試みであり、歴史的研究が理論の発展を促し、理論が新たな事実の発掘を促すという、有機的連携を促進することができる。また、tough 構文という一見特殊な構文の本質を人間の言語能力という観点から解き明かすことによって、言語学習者の tough 構文、ひいては文構造全般に対する理解を促進するという、とりわけ教育的側面の社会的意義を認めることができる。

研究成果の概要(英文)：It is widely pointed out that the “be” passive is not acceptable in the infinitival clause of the “tough” construction (tough clause, henceforth), while “get” or “become” passives are relatively acceptable there. Taking this fact into account, it is interesting that the “be” passive was acceptable in the tough clause around the 15th century. These facts can be accounted for by assuming the syntactic category of the tough clause has been vP since the 15th century, while the syntactic category of the “be” in the passive has changed from V to Aux after the 15th century.

研究分野：英語学

キーワード：tough構文 生成文法 英語史 統語構造 不定詞

## 1. 研究開始当初の背景

tough 構文(難易を表す形容詞が不定詞節を補部を取る構文(eg, John is easy to please.))の研究は、1980年代には生成文法の主要な研究テーマであったが、極小主義が登場してからは一旦下火になった感があった。しかし、2000年代に入り、極小主義の枠組みで tough 構文の構造、派生を分析する研究が再び注目を集めるようになってきている。(Hornstein (2001)、Hicks (2009))

しかしこれらの研究の中には、新しい枠組みの中で得られた新しい分析手法を応用することに重点を置いた結果、極小主義以前の基本的仮説を無批判に前提としているものも少なくなく、これまでに蓄積された言語事実を広く捉え切れていないものも散見される。とりわけ、tough 構文の歴史的発達については、その発達の一部について実証的試みが見られるが、包括的な研究は少なく、また、歴史的検証が従来の理論的分析に一石を投じる可能性があることは示唆されていないと思われる。

筆者は Nakagawa (2001)において、Wurff (1990)が提唱した「NP 移動による派生から空演算子移動による派生への変遷」という、tough 構文の歴史的発達に対する分析を、不定詞節の構造の歴史的変化から説明したが、近年の極小主義の研究では tough 構文を空演算子移動によって派生する分析そのものが再検証の対象になりつつある。

このような研究状況にあって、中川(2011, 2013)では tough 構文が NP 移動的な特性と空演算子移動的特性の両方を示すことについて、歴史的視点からその分析可能性を示している。本研究においては、このような研究の延長上に想定される、tough 構文の歴史的発達に対する新しい視座を見出すことを目標とした。具体的には、tough 構文の不定詞節が重層化(多重に不定詞節が埋め込まれるようになること)することを理論的に正しく、そして通時的に捉えることによって、先述した、tough 構文の NP 移動的特質と空演算子移動的特質の両方に説明を与えることを目指した。

## 2. 研究の目的

本研究においては、tough 構文において、不定詞節が重層化するようになる歴史的発達を、理論的かつ実証的に分析することによって、tough 構文が示す、他の不定詞構文にはない相矛盾する特性(NP 移動的特性と空演算子移動的特性)を説明すると共に、その前提となる tough 構文における不定詞節の統語範疇について明らかにすることを目標とした。

## 3. 研究の方法

本研究においては、先行研究を詳細に分析しつつ、一次言語資料を利用した調査等を通じて、経験的にも概念的にも妥当な理論の構築を目指した。

## 4. 研究成果

動詞や形容詞の補部位置に現れる不定詞節(以下、tough 節)の重層性については、tough 節の範疇とともに論じられることが多い。tough 節が重層化しその内部から連続循環的な移動が可能であるならば、tough 節の範疇は CP であると考えられ、tough 節が重層化しないのであれば、その内部からの移動は名詞句移動によることが可能であり、tough 節の範疇も CP より小さいものであると考えることが可能になる。そこで本研究においては、まず、tough 節の範疇特性から調査した。その結果、tough 節がその歴史的発達過程でその統語範疇を拡大させたものの、それは弱フェイズとしての vP までであったと結論付けるに至った。主な論点は次の通りである。

現代英語の tough 節においては、(1a)に示すように、一般に、be 動詞に導かれる受動構文が現れることができないとされるが、(1b,c)に示すように、get あるいは become に導かれる受動構文になると容認性が向上する。

- (1) a. \* John is easy to be deceived.
- b. They are easy to become tobacco-addicted.
- c. Why some author's themes are easy to get approved?

また、現代英語では許されない be 動詞に導かれる受動構文が、1400年代前後を中心に tough 節において可能であったということも観察されている。これらの事実は、受動構文における be の統語的位置付けが、本動詞から助動詞へと通時的に変化したと考えることによって、tough 節において助動詞が生起し得るような機能範疇が発達しなかったという本研究の分析と符合する。具体的には以下の通りである。

tough 構文における受動不定詞は 14 世紀の終わりごろから出現し、初期近代英語期には衰退に向かっている。これは、tough 構文において受動不定詞が一定の生産性を有していたのがおよそ 1400 年代であったことを意味している。この時期の受動文の統語構造は如何なるものであったのであろうか。

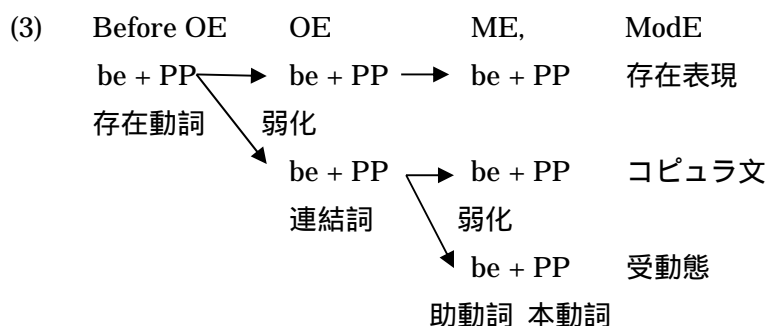
保坂(2014)等によると、古英語の受動文の形式は、一般に「状態」を意味した *beon* に過去分詞が後続する形式、「動作」を意味した *weorpan* に過去分詞が後続する形式、そして be 動

詞を伴わない屈折受動態の 3 形式であり、屈折受動態は初期中英語期までに消失したという。中英語期に入り、beon タイプの受動態は状態受動から動作受動へと機能を拡張し、weorþan タイプの受動態は 12 世紀前半には消滅したという。その後、近代英語期に get/become タイプの受動態が動作受動を表す構造として確立するまで、状態受動にも動作受動にも beon タイプが唯一の形式として用いられた。これらの過程を図示したのが(2)である。

(2)	OE	EME	LME	ModE
	屈折受動態	ほぼ消失		
	beon 受動態 (状態)	be 受動態	be 受動態	be 受動態 (状態)
	weorþan 受動態 (動作)	wurþen 受動態	be 受動態	be 受動態 (動作) get/become 受動態 (動作)

(保坂(2014:122))

ここで注目したいのが、beon の範疇である。保坂(2014:121ff.)は、be+過去分詞が元来、「～された状態で存在した」を意味し、be 動詞が本動詞としての機能を保持していた可能性を示唆している。その後、古英語期までに、本動詞の be は、存在の意味を希薄化した連結詞となり、中英語期以降、受動態を明示する機能を持つ助動詞として文法化されたという。保坂(2014:123)は be(on)タイプの受動態の文法化を次のように図示している。



be が本動詞としての機能を弱め、助動詞として再分析された時期は、beon が受動文一般に採用され、また、get/become 受動態が現れた時期とおおよそ重複する。この時期についてもう少し詳しく見てみたい。中尾(1972:264)は、weorþan (中英語期は wurthen) タイプの受動態が Northan 方言や East Midland 方言では初期中英語期までに消失したが、Southwestern 方言や Southeastern 方言では 1400 年ごろまで散発的に見られるという。また、受動構文に become が現れるのは 1500 年以後、get が現れるのは 17 世紀半ば以降であるという。中尾(1972:264)の観察を厳密に読むならば、動作受動を表すのに be タイプの受動構造しかなかったのはおよそ 1400 年代となり、これは、tough 節における受動不定詞が比較的生産的であった時期とほぼ重なる。

問題は 1400 年代における受動構文の be の統語的位置付けである。(4)は保坂(2014:124)が図示する be 受動態の構造変化である。

- (4)
- [VP NP [<sub>V</sub> be [<sub>AP</sub> PP]]]
  - > [<sub>CopP</sub> NP [<sub>Cop</sub> be [<sub>AP</sub> PP]]]
  - > [<sub>IP</sub> NP [<sub>I'</sub> be [<sub>VP</sub> PP]]]

be の存在動詞としての位置付けは本動詞である。連結詞としての be も本動詞である。be が「状態」にも「動作」にも使用できる助動詞として確立された段階、つまり現代英語の用法が確立された段階では、明らかに助動詞であり、それは V ではなく機能範疇 I に位置している。wurthen タイプと意味に基づく役割分担をしていた時期はどうであろうか、この時期において be は受動構文一般のマーカーとして確立しておらず、また「状態」とか「動作」といった意味的概念と結びついていたことを踏まえれば、この時期の be が完全に文法化していたとは考えにくい。また、受動構文が be タイプに一化されていた 1400 年代も「状態」と「動作」の構

文タイプとしての区別が話者に明確に意識されていなかった訳ではなく、それが、become や get の出現を招いたと考えるのが自然ではなかろうか。

つまり、1500 年ごろまでの be はある程度文法化が進んでいたものの、それは完全ではなく、語彙的意味も希薄化してはいるが保持され、本動詞的な統語解釈も不可能ではなかったと考えられる。これに対し、1500 年以降は、be の受動構文一般に対するマーカーとしての地位が確立したものと考えられる。これは 1500 年以降に現れた、become や get が本動詞としての位置付けを維持し続け、be の動作受動としての機能を完全に取り戻すことがなかったことからも支持されると考えられる。

ここで、1500 年頃を境に、受動構文の be と tough 節の関係がどのように変わったかが見えてくる。前節で述べたように、tough 節は助動詞が現れ得るような機能範疇を発達させて来なかった。したがって be が本動詞の位置に具現できる間は tough 節に受動不定詞が現れる可能性もあるが、be が助動詞として確立されると、それが位置すべき機能範疇を持たない tough 節に受動不定詞が現れる可能性は消滅する。つまり、tough 節に受動不定詞が現れなくなった時期と be が助動詞として確立する時期がおおよそ重複することは tough 節を vP と分析することによって説明が可能となる。

一方、tough 構文に受動不定詞が現れることが可能になった統語的環境としては、次のように考えることができよう。tough 節においては一般に状態を表すことができないので、tough 節に受動構文が現れるとすれば、それは動作受動であると予想できる。動作受動の方策が be 受動構文しかないのであれば、wurthen タイプの受動態が消失した時期に tough 節に be 受動構文が現れるようになったことも理解できる。但しこれは、wurthen タイプの受動構文が tough 節に具現可能であったことを示唆するので、さらなる調査が必要である。

tough 節の範疇が vP と確定されたことで、tough 節の重層化の問題は、tough 節の範疇とは直接関係づけられないことになる。したがって今後は、tough 節に現れる動詞がコントロール動詞のような不定詞節を取る動詞に拡大した経緯を明らかにすることが求められる。これについては今後の課題とする。

#### < 引用文献 >

- Hicks, Glyn (2009) "Tough-Constructions and Their Derivation," *Linguistic Inquiry* 40: 535-566.
- Hornstein, Norbert (2001) *Move! A minimalist theory of construal*, Blackwell, Oxford.
- 保坂道雄 (2014) 『文法化する英語』 開拓社, 東京
- Nakagawa, Naoshi (2001) "Bare vP Analysis of the Infinitival Clause in OE: Historical Development of Tough Constructions," *English Linguistics* 18-2, 507-535.
- 中川直志 (2011) 「Tough 構文に対する単文分析の可能性」, 『日本英文学会第 83 回大会 Proceedings』, 日本英文学会, 25-27.
- 中川直志 (2013) 「tough 構文の構造と派生の歴史的変遷について」, 中野弘三・田中智之(編) 『言語変化：動機とメカニズム』, 開拓社.
- 中尾俊夫 (1972) 『英語史 II』 大修館書店, 東京.
- Wurff, Wim van der (1990) "The Easy to Please Construction in Old and Middle English," *Papers from the 5th International Conference on English Historical Linguistics*, ed. by Adamson, Sylvia, Vivien Law, Nigel Vincent and Susan Wright, 519-536, Benjamins, Amsterdam and Philadelphia.

#### 5 . 主な発表論文等

[ 雑誌論文 ] (計 1 件)

中川直志 tough 節の範疇についての一考察：共時的視点と通時的視点から、JELS 34、査読有、日本英語学会、2017、119-125

[ 学会発表 ] (計 1 件)

中川直志 tough 節の範疇についての一考察：共時的視点と通時的視点から、日本英語学会第 34 回大会、2016

[ 図書 ] (計 1 件)

田中智之、中川直志 他 20 名、開拓社、文法変化と言語理論、2016、308

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。